

生乳の需給等に係る情報交換会（第7回）議事概要

開催日時：令和6年9月18日（水）10:00～12:00

開催場所：web 会議

出席者：別添参照

議事概要：

農林水産省から、資料に基づき、①生乳取扱量等の見込み、②飲用牛乳の価格構造、③需給安定に必要な取組について説明し、それを踏まえた出席者からの意見の概要は以下の通り。

① 生乳取扱量等の見込み

【夏の猛暑、冬の分娩のズレの影響について】

（九州生乳販連）九州は7月以降猛暑、残暑が続いているが生産は回復傾向。年末年始は前年並みの見込み。

（関東生乳販連）猛暑の影響で生産は乱高下。分娩のズレの影響で今後生産が増加する見込みであり、年末年始の需給を注視する必要。

（東北生乳販連）生産は今後回復する見込みだが、不需要期に前年を超えない見込み。生産が前年を下回っても需要が低下しており、年末年始の需給状況は厳しいと見ている。

（ホクレン）前年比の動きとしてJミルク予測と同じように推移していくと見ている。今年は、昨年ほど暑くなかったので、今のところ猛暑による大きな影響があったとは見ていない。

（ミルクネット）道東のエリアでは、夏場の生産の落ち込みは少なかった。分娩のズレにより、秋冬は対前年で数%程度生産が増加する見通し。来春までは生産量が多い状況が続くのではないかと見ている。

（ループライズ）昨年の猛暑の影響で分娩のズレがあり、冬にかけて生産が伸びる見通しだが、自社の取扱量そのものが少ないため、扱えない量ではない。今夏も暑かったが、中標津では影響はなかった。

（MMJ）北海道では猛暑が昨年ほどではなかったことや暑熱対策が強化されたことにより、生産の落ち込みはなかったが、西日本では生産の落ち込みが大きかった。都府県では、暑さが続き、7、8月は問題なかった牧場でも9月に生産が落ちているところがある。

【今年の年末年始の加工向け処理見通しについて】

（関東生乳販連）東日本の加工処理能力は令和3年と同程度かそれを若干下回る一方で、飲用需要減、広域生乳の流入増、堅調な生乳生産という要素から、東日本での処理不可能乳発生を危惧。

（MMJ）冬に向けては今年から稼働する自社工場もフル稼働するとともに、例年お願いしている加工工場などをお願いし、処理をしていく。

➡需給見通しの精緻化を図っていく必要がある。今後の生産・需要動向等について次回の情報交換会でも議論していきたい。

② 飲用牛乳の価格構造

(九州生乳販連) 一部量販店は域外生乳を使った安価な商品で商圈を伸ばしていた。その後、その商品が納入できなくなり、突然、他のメーカーに代替の注文を入れた結果、他の小売で欠品が生じる事態になった。安売りにより値下げ圧力をかけ、不安定な供給により他の乳業に影響を与えている。年間の安定供給が重要。

(近畿生乳販連) 小売価格帯については、系統の中でも開きがあり、乳業や小売の流通・販売手法の問題。域外の生乳を使用したエブリデイロープライスで販売される牛乳の影響により、域内生乳の加工向けもしくは販売不可能乳が増えることは業界にとって好ましくない。このため、広域生乳が有する需給調整の手法について知恵を出していくことが重要。

(東海酪連) 需要期のピークに 189 円の牛乳のチラシがあった。こうした安売りを放置すると乳価交渉や牛乳の価値を上げていこうというときに弊害になる。

(関東生乳販連) 年間通じて一定量購入している大手乳業向けと必要時に必要量を送る中小・農プラ向けの販売価格では差がある。原料乳価格の差が乳業から小売への納品価格の差ではないというのはその通りだが、乳業から小売への納品価格の差がなぜ生じているのかは検討が必要。指定団体や乳業の経営努力不足に起因するものであれば頑張らないといけませんが、需給調整コストの負担の差によるものであれば、何らかの対応が必要ではないか。

➡一般的な話だが、メーカーにとって、販促費や商品のロス率を含めてコストになる。物流費もやり方次第で差が大きい。これまで国内では、小売とメーカーとが垂直統合する中で、こうしたコストを抑制する取組をしてきた。これにより安価な商品でも、利益率を設定することが可能と聞いている。

(MMJ) 製品になると商品のバリエーションも増える。また、小売の売場づくりの中では、個別商品だけでなくカテゴリー全体での粗利を設定しているところもあり、小売段階で価格にバリエーションが出てくるのは自然なことだと認識。

(東北生乳販連) 関東と同様、需給調整コストを加味して大手と中小で価格に差をつけるというのはある。系統外生乳を原料とした牛乳に商圈が移動していると聞いているが、それは小売価格の差によるものと考えられる。その価格差がなぜ生じるのかは分からないが、根本的な原因を抑えるため、課題に絞った客観的な数字で出してもらえるとありがたい。

(カネカ) 牛乳にいかに付加価値をつけていくのか、消費者や生産者の利

益になるようにやっていきたい。系統外事業者が増えたことにより、生乳の販売価格は変わらなかったという理解で良いか。

➡少なくとも国内では小売段階で激しい競争が続いていることは確か。

(サツラク) 資料の内容は実態に即したものだと考えている。小売からの値下げ圧力が強いと感じている。安定供給して、消費者が安心して買えるというのが重要。一定の利益を得る必要があり、適正な価格帯で販売する必要。

(ミルクネット) 北海道内の小売価格よりも都府県の小売価格の方が安いと感じる。都府県の方が中小メーカーや小売での競争が激しいのではないか。(7ページのグラフで) 2022年は山の部分が鋭角だが、2024年は鈍角になっている。量は多くはないと思うが、今回の生乳の値上げの時に十分に値上げができなかったものもあり、こうしたことが市場に影響を与えているのではないか。

(ホクレン) 小売価格の差は原料乳価よりも物流・販売コストの構造に差があるという説明であったが、公表される資料であれば物流・販売コストの内訳はもう少し丁寧な説明が必要ではないか。

③ 需給安定に必要な取組

(九州生乳販連) 加工施設の利用については、今後協議でいいと思うが、多様な生乳を入れたときにどのようなトラブルが起きるのか想定する必要がある。

➡加工施設の融通については、少しずつ議論を積み上げていきたい。

(カネカ) 加工施設利用については、農水省から乳業へ協力要請をするのか。

➡まずは実態を見ながら議論を重ねていくということではないかと考えている。

以上